

## グラム染色にて非典型的な形態を示したが肺炎球菌推定に至った敗血症の一例

◎松本 早紀<sup>1)</sup>、水澤 広樹<sup>1)</sup>、村井 洋子<sup>1)</sup>、鎌倉 佳子<sup>1)</sup>、西原 幸一<sup>1)</sup>  
地域医療振興協会 市立奈良病院<sup>1)</sup>

【はじめに】肺炎球菌はグラム陽性双球菌であり、肺炎、髄膜炎、敗血症などの原因となる。今回、血液培養からグラム染色にて非典型的な形態を示したが肺炎球菌であることを推定し、医師への早期報告に至った敗血症の一例を経験したので報告する。

【症例】90歳代女性。夜中より嘔吐を繰り返しており、翌日早朝に緊急搬送された。搬送時に血液培養2セットと尿培養が提出され、敗血症を疑いCTRXが投与され入院となった。その後、肺炎球菌による敗血症と診断され治療継続し退院となった。

【検査および考察】血液培養採取後8時間で2セットが陽性となった。当直時間帯のためただちに処理できず、陽性後10時間ほど血液培養装置内にて培養継続状態であった。培養ボトルは溶血性を示しており、ボトル内血液はややとろみを帯びていた。血液培養のグラム染色にてグラム陰性双球菌様の菌体を認めた。ボトル内血液の性状および培養陽性後ただちに処理できなかったことより、自己融解によって非典型的なグラム染色像を示した肺炎球菌を疑った。

ボトル内血液1mlを3000rpm、5分にて遠心した上清より脳脊髄膜炎菌莢膜多糖抗原キット（イムノキャッチ肺炎球菌）を実施したところ陽性となった。検査結果より肺炎球菌であることを推定し、担当医へ報告した。血液培養は血液寒天培地およびチョコレート寒天培地にて48時間炭酸ガス培養を行ったが菌の発育は認められなかった。また、同日に提出された尿培養は培養未発育であった。

【まとめ】肺炎球菌は自己融解によりグラム染色にて非典型的な形態を示し、培養にて発育しないことがある。ただちに処理できることが最適であるが、当直時間帯に血液培養の処理を行っていない施設や培養検査を外部委託している施設では速やかに処理ができないため、菌検出は困難となる場合がある。そのような状況でも血液培養陽性後のボトルの保存状態や経過時間、ボトル内血液の性状や塗抹所見にて肺炎球菌を疑うことができる。また、抗原キットを用いることで検査の信頼性をあげ、医師への早期報告が可能である。連絡先：0742-24-1251